

#### (4) 実践の考察

新学習指導要領では、「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養が偏りなく実現されることが求められています。そのために、単元など内容や時間のまとまりを見通しながら、生徒や学校の実態、指導の内容に応じて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の質的改善を行うことが重要となります。しかし、「どこから手を付けてよいのか分からない」「忙しくて授業の分析などできない」「改善の手立てが思い付かない」など、様々な理由から授業改善に取り組むことができないことも考えられます。

本研究委員会では、このことを念頭に置き、生徒の学習の質を高めることを目指した授業改善を図るためのプロセスや方法を探ってきました。そして、改善の「一步を踏み出す」ためのプロセスとツール（「授業振り返り〔スタート〕シート」「授業振り返りシート」「手立てシート」）を提案し、改善に取り組むことのよさや大切さを感じてもらいたいと思い研究を進めてきました。A校、B校の実践を振り返り、本研究委員会で考えた授業の質的改善を図るためのプロセスや方法が適切であったか考察します。

#### A校（2年生）の実践から

生徒や教師の指導について、授業の録画記録と日々の授業の観察を基に客観的な振り返りを行ったことで、研究委員の先生は解決すべき課題を自覚するとともに、これまで気付いていなかった生徒の成長にも気付くことができ、授業改善に対するモチベーションが高まりました。そして、改善の糸口を探るべく、「授業振り返りシート」による学習指導過程に沿った実態把握を行ったことで、「単元ゴールの把握」の過程において、単元を見通して具体的な学習計画を立て、ゴールを生徒に明確に示すことや、ゴール達成に向けて必要となる学習活動を段階的に設定することについて、取組が不十分だったことが見えてきました。そこで研究委員の先生は、下記の**ア**の手立てによる授業の質的改善をスタートしました（〔 〕内は、「手立てシート」に対応しています）。

##### **ア** 学習の見通しをもたせる

単元全体を通して生徒にどのような力を付けたいのか、また、そのためにどのような言語活動を行うのかについて、逆向き設計で学習指導計画を立て、単元のスタートに生徒に明確に示した〔主-D・H〕。

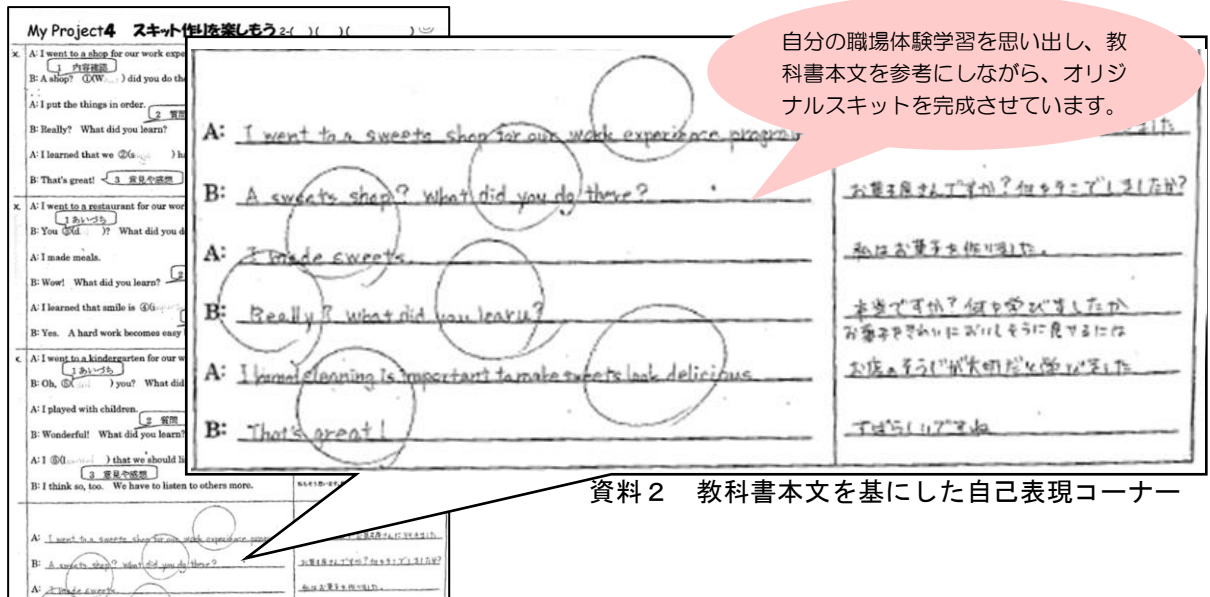


「授業振り返りシート」による実態把握を受け、逆向き設計で大まかな単元計画を立てたことで、単元のスタートに、単元ゴールの活動内容や各活動とのつながりについて生徒にきちんと伝え、各学習活動がゴールにつながるということを生徒に意識させることができました。また、生徒が興味をもって取り組むことができる言語活動を段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりするなど、様々な手立てによる授業づくりを構想し、授業改善を試みることができました。

教師が見通しをもって授業づくりを行うことを意識するようになった結果、生徒たちの学習活動に取り組む姿勢にも良い変化が見られるようになりました。単元ゴールを意識させる手立てを取ったことで、音読の練習に一生懸命取り組んだり、ワークシートの自己表現コーナーにたくさん英文を書いたりするなど、自分の考えを英語で相手に伝えることができるようになるために努力する姿が多く見られるようになりました（次頁資料1、2）。このことから、学習の見通しをもたせたことは、学びに向かう力、人間性等の涵養につながる手立てであったと考えます。

学習に取り組む姿勢が変わったことで、2学期の定期テストで良い結果を出すことができた生徒

も多く見られ、平均点にも伸びが見られました。教師の見通しをもった指導が、生徒の主体的に学ぶ態度を育て、それが知識及び技能の習得にもつながったと考察します。



資料2 教科書本文を基にした自己表現コーナー

資料1 ゴールの達成につながるインプットを目指したワークシート

8月の振り返りでは、生徒の学習意欲に差があること、自己表現することやペア、グループで学習することが苦手な生徒が多いということが課題として挙げられました。今回は、「授業振り返りシート」の「単元ゴール達成に向けた学習の見通し、理解や練習」の過程に着目しました。ここでも、学習の見通しをもたせるための手立てが不足していること、また、生徒の表現力を育成する言語活動や、ペアやグループで協力して学習課題に取り組んだり、学び合ったりする場の設定が少ないことが見えてきました。これらを改善することが、生徒の学習活動への意欲向上につながるとし、イからエの手立てを実践しました。

#### イ 学習の見通しをもたせる

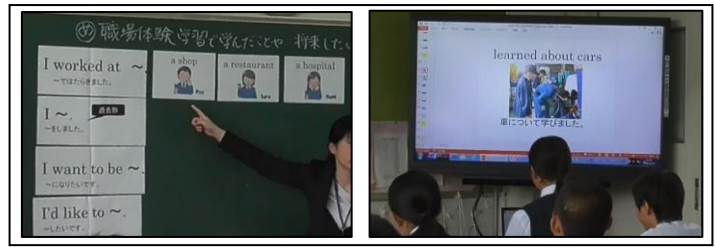
- (ア) 目指す姿を示した評価表を提示し、目標をもって学習活動に取り組むことができるようにする【主-W】。
- (イ) タスク型の学習活動を設定し、パフォーマンスモデルを示してゴールの姿をイメージしやすくしたり、視覚的補助を活用してゴールやゴール達成に向けて取り組むべきこと、手順などを可視化して示したりする【主-L・R】。



ゴールの達成に向けて何をすればいいのかが伝わりやすいように、パフォーマンス課題の評価基準表をあらかじめ提示するようにしました（次頁資料3）。モデルパフォーマンスの提示では、ヒントとなる写真やキーワードを提示する視覚的補助（次頁資料4）を行ったことで、生徒の聞こうとする意欲を引き出すことができ、口頭での説明の部分を減らすこともできました。このことにより、活動がスムーズに進み、生徒の活動量を増やすことができました。

| スピーチ原案を読む練習をしよう。(5時間45分に1回) | 内容                                       | スピーチ                   |
|-----------------------------|------------------------------------------|------------------------|
| 書けている。                      | 4 相手意識をもって職場体験で学んだことや将来したいことなどについて書いている。 | 4 原稿を見ないで、表情豊かに発表している。 |
| 書けている。                      | 3 職場体験で学んだことや将来したいことなどについて書いている。         | 3 原稿を見ないで発表している。       |
| 書けている。                      | 2 職場体験で学んだこと、将来したいことについてどちらかを書いている。      | 2 原稿を見て発表している。         |
| 書いている。                      | 1 表現できない。                                | 1 原稿を見ていて声が小さい。        |

資料 3 評価基準表



資料 4 視覚的補助

### ウ 生徒の実態に合った言語活動を設定する

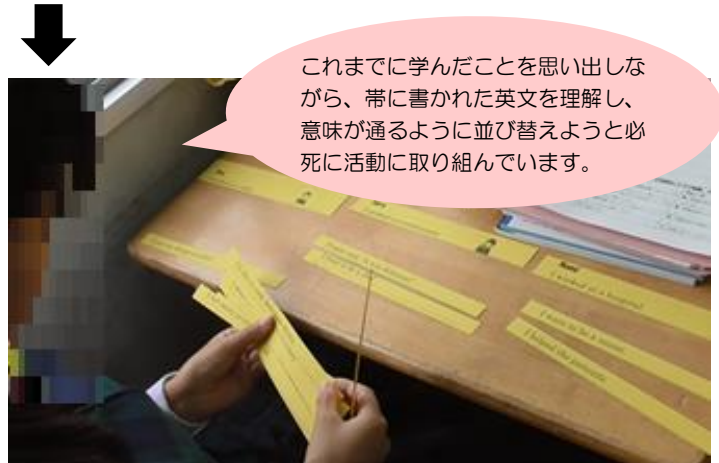
学級集団の性質や学習到達状況に配慮した学習活動の設定を行う〔主-M・N・S〕。

生徒の実態をより具体的に把握するようになったことで、学習ゴールを達成させるためにどのような学習が必要かについて深く考え、より生徒の実態に合った学習活動を設定することができるようになりました。学んだことを活用して、自分の体験や思いを伝える表現活動では、人前で自分を表現することが苦手な生徒が多く、自己表現の場も不足しているという実態を念頭に置いた指導になるよう心掛

けました。生徒にとって身近な話題である職場体験学習を題材としたり、生徒が英語を使う機会を増やしたりするなどの工夫をすることができました。

また、技能習得の偏りがなく、ペアトークやスピーチライティング、発表など、複数の技能を組み合わせる活動を設定することができました。生徒にスピーチの構成について考えさせる際には、生徒の学習意欲を引き出し、理解を助けるために、一人一人に英文の書かれた帯のセットを配付し、教科書の本文や ALT のスピーチを参考にして正しく並べ替える活動に取り組ませました(資料 5)。帯に書かれた英文をよく読み、モデルと比較しながら考える必然性をもたせるために、3つ分のスピーチの英文を混ぜて1セットにしました。

これらの学習活動を通して、生徒は英語で自己表現することに慣れ、クラスメートとのコミュニケーション活動を楽しむようになってきました。生徒が既得の知識や技能を使ってコミュニケーションを図る場を増やし、英語を使って理解したり表現したりすることへの抵抗感を減らす工夫をしたことで、英語を用いて積極的に自己を表現しようという態度が育ってきており、学びに向かう力、人間性等の涵養が図られていると考えます。また、生徒が自分の体験について、既得の知識・技能を駆使しながら話したり書いたりして伝えることができるようになってきたことから、生徒の学習到達度に応じた学習課題の設定や、獲得した知識・技能をコミュニケーションの場面において繰り返し活用する場の設定は、知識及び技能の確実な習得につながるものであったと考えます。



資料 5 活動に取り組む生徒



**エ ペアやグループでの学習を通して学び合う環境作りを行う**

ペアやグループで解決する必然性がある学習活動を継続して設定する〔主－O、対－J〕。



共に学び伸びる環境づくりを行うことで、様々な学習到達度にある生徒が安心して学習することができ、コミュニケーション力を身に付けていくことにもつながると考え、帯活動としてペアトーク活動を設定しました（資料 6、7）。生徒がペアで協力して学習を進めることに慣れさせるために、話題は職場体験学習など生徒にとって身近で、単元ゴールの達成にもつながるものとし、関連した写真や定着させたい表現を文字にして提示するなど、生徒が活動に取り組みやすいよう工夫することができました。

クラスメートと英語で対話するペアトークに継続して取り組んだことについて、10 月の生徒の意識調査では、70%以上の生徒が「楽しい」と回答していました。理由として、「相手の気持ちなどが分かるから」「教えてもらいながら最後まできちんと言うことができたから」「ふだんあまりしゃべらない人とも英語で会話できるのは楽しかったから」などの記述が見られました。回数を重ねるたびに抵抗感が減り、スムーズに話すことができるようになって自信を付けることができたり、協働意識が生まれ、英語で伝え合う楽しさを実感するようになったりしたものと考えます。また、約 85%の生徒が「ペアやグループでの学習は自分の英語力アップにつながると思う」と回答しており、理由として資料 8に見られるように、「教え合える、学び合える」「コミュニケーションの体験ができる」「英語を使う必然性がある」といったペアやグループにおける学習の利点を指摘していました。これらのことから、ペアやグループでの学習が機能するための手立てを取ったことは、生徒の学習への動機付けを高め、学びに向かう力、人間性等の涵養につながったと考察します。今後、英語を通じたコミュニケーションを行う機会をより充実したものにしていくことで、相手意識をもって自己表現することや、他者を理解しようとする態度の育成、また、知識及び技能の習得、思考力、判断力、表現力等の育成も期待できると考えます。



資料 6 ペアトークに取り組む様子



資料 7 グループでアイデアを共有する様子

ペアやグループでの活動にすぐに取り掛かり、与えられた学習課題を解決するために協力しています。

- |                            |                       |
|----------------------------|-----------------------|
| ・友だちが教えてくれるから              | ・話すことで身に付くから          |
| ・何回も言うことで慣れるから             | ・英語で会話をすると覚えると思うから    |
| ・友達とする方が楽しいから              | ・友達の発音などが聞けるから        |
| ・英語でしゃべるから                 | ・実際に外国に行くとそれが普通だと思うから |
| ・分からないところも教え合えるから          | ・友達の話を参考にすることができるから   |
| ・少しでも発音や読みを理解することができると思うから |                       |
| ・人としゃべることで分からなかったことが分かるから  |                       |

資料 8 ペアやグループでの学習は英語力アップにつながると思う理由  
（公開授業後の意識調査より）

## B 校（2 年生）の実践から

B 校は、生徒がまじめに各学習活動に取り組み、基礎的な知識や技能を着実に身に付けてきていましたが、全体的に学習活動に受け身であることや、表現活動において間違いを恐れ、提示されたモデルのまねで終わってしまう生徒が少なくないことなど、解決したい課題がありました。「授業振り返りシート」による学習指導過程に沿った実態把握を図ったところ、「単元ゴール達成に向けた学習の見通し、理解と練習」の過程において、「言語活動を行う際、相手や場面を意識させていなかった」「言語活動の設定の際、生徒の実態を意識したものになっていなかった」「4 技能 5 領域においてコミュニケーションを図る力をバランスよく育成していなかった」など、改善に取り組みたい課題が見えてきました。

生徒がより豊かな語彙・表現を身に付け、体験を積み重ねながら、実際のコミュニケーションを図ることができる英語力を育むことを目指し、研究委員の先生は、**ア**と**イ**の手立てを実践することから授業改善をスタートしました。

**ア インプットやインテイクにつながる活動に取り組む時間を増やし、言語活動の質を高める**

- (ア) 生徒が様々な場面で英語に触れ、インプットの量を増やすことができるようにする [主－M・S、対－C・D]。
- (イ) 4 技能 5 領域においてコミュニケーションを図ることができる力をバランスよく育成する [深－F]。



生徒が英語に触れる機会を増やすことを目指し、Teacher Talk や ALT の活用について改善を図りました。理解が難しいと思われる発話について、日本語訳を与えるのではなく、ジェスチャーを用いたり、辞書を使わせたりしました。また、理解を確かめるための発問をし、生徒に答えさせたりしました。生徒の英語を聞き取ろうとする意識が高まり、情報や語彙・表現を豊かにするチャンスも広がったと考えます。

また、話すこと・聞くことに比べ、書いたり話したりするコミュニケーション活動が少なくなりがちなので、複数単元を逆向き設計で計画し、技能の育成に偏りがないように努めました。4 技能 5 領域においてコミュニケーションを図ることができる力は、総合的に育成されるべきで、習得と活用を繰り返しながら時間をかけて育っていくものなので、授業づくりにおいて常に意識しておくこととしました。

2 学期以降は、6 月の振り返りで明らかになった課題のうち、取り組んでいなかったものにも焦点を当てて、**イ**から**エ**の手立てによる改善に取り組みました。

**イ 身に付けた知識・技能をコミュニケーションの場面で活用する**

オーセンティックでコミュニケーションの必然性のある課題を設定する [主－C・N、対－E、深－D]。

**ウ 4 技能 5 領域においてコミュニケーションを図ることができる力をバランスよく育成する**

読んで得た情報を自分の言葉で整理し、書いて人に伝える [対－E、深－F]。

**エ 自分の考えを整理したり、修正したりして、学びを広げたり深めたりする**

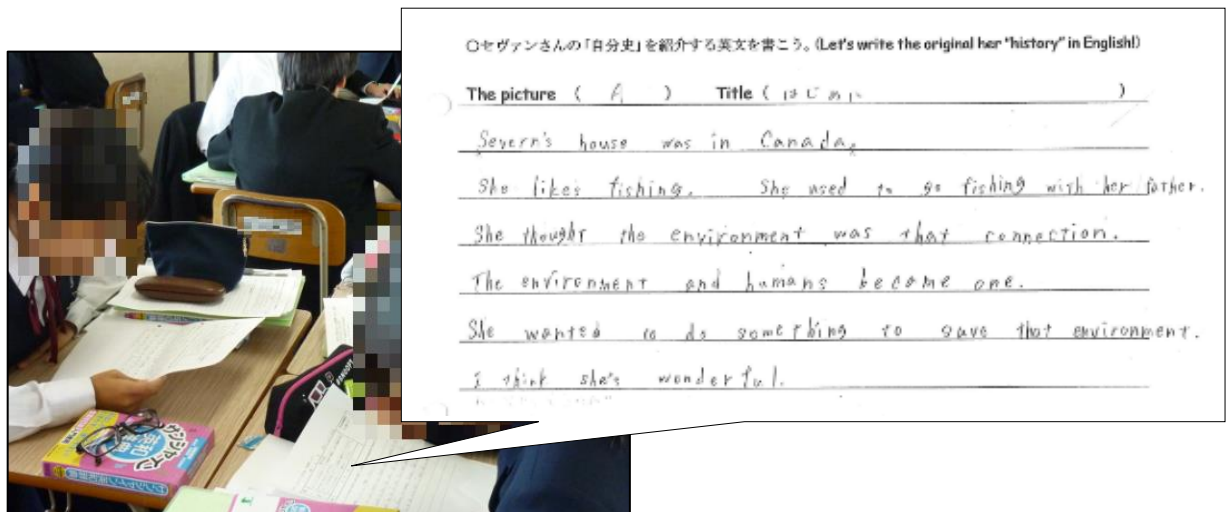
グループで互いに作品を読んでフィードバックしたり、表現や構成などを学び合ったりする [対－F、深－F・G]。



身に付けた知識及び技能をコミュニケーションの場面で活用させる際、コミュニケーションの相手や場面を意識させるために、本単元で紹介された人物に、授業を通して学んだことや自分の考えを英語で書いて送るというオーセンティックな単元ゴールを設定しました。そして、その単元ゴールを達成する過程において、生徒が英語を通じて、その人物や扱われている話題についてより身近なものとして捉え、話題について深く考えたり、自分の考えをもったりすることができる活動に取り組ませたいと考えました。そこで、その人物について、教科書以外の情報を英語で用意し、読み取った情報を英語で伝え合うという技能統合型の学習活動を設定しました。また、生徒同士で作品を読み合ったり、コメントを伝え合ったりする場を設定することで、考えを広げたり、表現を豊かにしたりする機会を増やすことができると考え、クラスメートと作品を読み合い、互いにフィードバックする活動を設定しました。

オーセンティックな題材であるため、難しさを感じた生徒も多かったようですが、自分の力で英文を読んだり書いたりする体験を少しずつ積み重ねてきていた生徒は、既得の知識や資料から得た情報を活用したり、辞書を活用したりしながら、分かったことを整理して英語で書き表しており、この学習活動を通して思考力、判断力、表現力等の育成が図られたと考えます。その人物に実際にメッセージを送るというゴールの設定や、資料として使ったものが、クラスメートによって書かれたものであったことも、資料を読むという生徒の意欲を引き出した要因と考えられます(資料 9)。自己評価のコメントに、「単語を調べたりしながら、意味が分かっていったのでよかった」「全てを埋めることはできなかったが、半分以上を埋めることができた。セヴァンさんのすごさが分かった」など、自力で資料を読み取ることができたことへの喜びを書いた生徒もいました。

今回、時間内に課題を終わらせることができなかった生徒が自己肯定感を下げたのではないかと懸念もありますので、今後、言語活動のレベルを調整しながら同様の体験を積み重ね、自信を付けさせていく必要があると思われます。

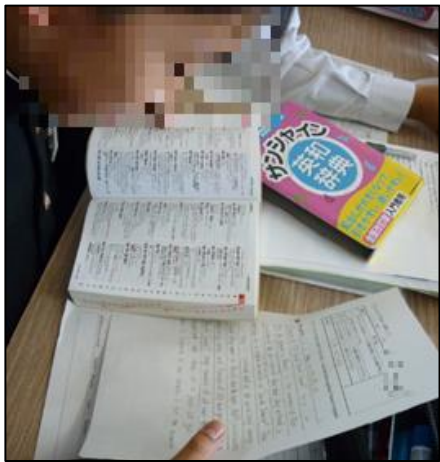


資料 9 クラスメートが書いた「セヴァンさんの『自分史』概要文」を真剣に読む生徒たち

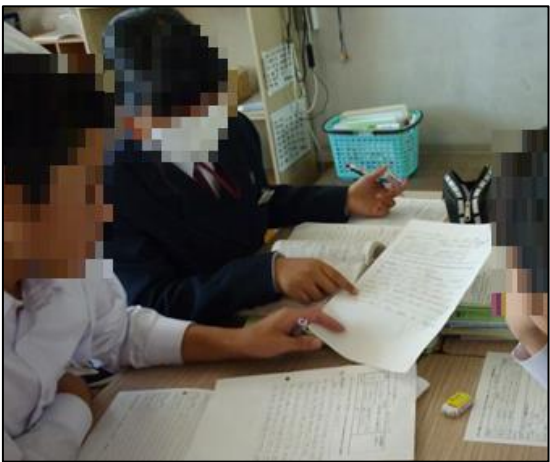
生徒が作成した概要文の多くは、英文の量が多く、未習語を使っていた生徒もいたもので、内容を理解するのは難しかったと推察しますが、互いに教え合ったり、辞書を使ったりして読み終えようと努力し、気付いたことを伝え合う姿が多く見られました(次頁資料 10、11)。

その後の授業における言語活動の際、モデル文の模倣に終わらず、自分の言葉で表現しようとする生徒の積極的な態度が見られた(次頁資料 12)ことから、今回の学習活動は生徒の学びに向かう力、人間性等の涵養につながっていたと考えます。また、全体的に文法上の間違いが減少し、長

文を読むことに慣れてきた様子も見られることから、知識及び技能の習得の育成も図られていたと考察します。



資料 10 辞書を使って内容を読み取ろうとしている生徒



資料 11 互いの作品について質問し合う生徒たち

セヴァンさんへのメッセージ ～What can we do for the earth?～

| 評価 | 内容                                    | 記号 |
|----|---------------------------------------|----|
| A  | これまで得たセヴァンさんの情報を入れつつ、セヴァンさんの問いに答えている。 | A  |
| B  | セヴァンさんの問いに、自分の答えを英語で書いている。            | B  |
| C  | セヴァンさんの問いに、自分の答えを英語で書けない。             | C  |

振り返り 今までは、一番、文書を書くことができていたが、今は、

1、あなたが一番心に残っているセヴァンさんの言葉や彼女の行動は何ですか？

If you can't fix the environment, please stop breaking.

2、What can we do for the earth?

I will がんばろう

3、Let's write your idea to Ms. Severn!

Nice to meet you. I'm Akari Ikeda from Japan. You said "If you fix the environment, please stop breaking."

I agree with you. I think something to save that enviroment. I will pick up garbage. Because I can do it soon.

I think that you is great.

資料 12 生徒ワークシート（セヴァンさんへのメッセージ）

| 評価 | 内容                                    | 記号 |
|----|---------------------------------------|----|
| A  | これまで得たセヴァンさんの情報を入れつつ、セヴァンさんの問いに答えている。 | A  |
| B  | セヴァンさんの問いに、自分の答えを英語で書いている。            | B  |
| C  | セヴァンさんの問いに、自分の答えを英語で書けない。             | C  |

振り返り 自分の気持ちを英語で伝えるのが難しい

1、あなたが一番心に残っているセヴァンさんの言葉や彼女の行動は何ですか？

"If you can't fix the environment, please stop breaking it!"

2、What can we do for the earth?

We can send food, clothes, money to children.

3、Let's write your idea to Ms. Severn!

Hello. Nice to meet you. I'm Mai from Japan.

You said,

"If you can't fix the environment, please stop breaking it!"

I agree with you. I am very afraid.

I will send food, clothes, money to children.

Because I want to do something helpfu!

I want to be helpful!  
I want to do something helpfu!



## 両校の取組を通して

A 校、B 校の授業改善の実践を通して見えてきたことを下記にまとめました。

- 「授業振り返りシート」を使い、学習指導過程に沿って授業を振り返ることで、課題の解決に向けて何に取り組めばよいのか、授業をイメージしながら考えることができました。様々な項目から授業改善につながるヒントを得て、生徒の実態に合わせた手立てを実践したことで、生徒の様子が変わってきました。一度に全ての項目に取り組むことはできませんが、気になる項目、できそうな項目から取り組みを始めることが、授業改善の第一歩となると考えます。
- 「授業振り返りシート」を使って授業を見直したことで、新学習指導要領の趣旨に基づく授業改善について意見交流ができました。授業を改善するに当たり、自分の授業を見直す際にも、人の授業を見る際にも、視点となるものがあると気付きが起こりやすく、効果的な手立ての設定につながると考えます。
- 「手立てシート」は、学習指導過程ごとに「主体的・対話的で深い学び」の視点で分類されており、改善の方向性や視点を考える手掛かりとして使うことができました。教師の「やってみよう」という気持ちを引き出すことにもつながりました。
- 授業改善に取り組むことで、生徒の実態を把握することの大切さがよく分かりました。今回は日々の実態把握の方法として、授業を録画することを取り入れましたが、生徒の反応や教師の発言などを知ることができただけでなく、個々の生徒のよさや困り感にも気付くこともできました。授業中の観察やワークシートの記述の見取りなども、以前より視点をもって行うようになり、生徒の実態を考慮した的確な指導を行うことにつながりました。生徒を励ましたり、褒めたりする機会も増えました。教師が生徒や自分の指導の実態を把握することは、授業の質的改善の土台になるものだと考えます。
- 単元を見通して逆向き設計で指導計画を作成することで、生徒に身に付けさせたい力が明確になり、そのために必要な指導ができるようになりました。生徒の興味や関心を引き出すことができる言語活動を、生徒の実態に応じて段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりすることを試みることができました。教師自身が見通しをもっていることで、生徒の学習がより質の高いものになり、意欲の向上にも効果があることが分かりました。
- 授業を録画したり、公開して人に見てもらったりすることを 1 年に 1 回以上行うことは、授業改善に有効だということが分かりました。学期に 1 回、また、単元ごとなど定期的に振り返ることで、生徒の変容が見えやすくなると考えます。